

表1 CBDが治療効果を有する可能性のある疾患の概要 Pisantiら(2017)からの引用

疾患	効能
アルツハイマー病	<i>in vitro</i> 及び <i>in vivo</i> のアミロイドβ蛋白(Aβ)惹起性の神経炎症及び神経変性反応における抗炎症性、抗酸化性、抗アポトーシス性
パーキンソン病	ドーパミン作動性損傷の減衰(<i>in vivo</i>); 神経保護; 精神症状評価の向上とアジテーション(不穏・興奮)、患者における悪夢と攻撃的行動の減少
多発性硬化症	マウスにおけるEAE(実験的自己免疫性脳脊髄炎:Experimental autoimmune encephalomyelitis)改善の徴候、抗炎症性と免疫調節特性
ハンチントン病	トランスジェニックマウス(遺伝子導入マウス)モデルにおける神経保護作用と抗酸化作用; 患者間に臨床的な有意差はみられなかった
低酸素虚血性脳障害	短期的神経保護作用; 興奮毒性、酸化ストレス、炎症の抑制(<i>in vitro</i> とげっ歯類動物モデル)
疼痛	他の治療法に効果がみられない(薬剤抵抗性のある)神経因性疼痛を患う患者における鎮痛作用
精神障害	統合失調症の動物モデルにおける行動変化及びグリア(神経膠)的变化の減衰; ケタミン誘導性の症状に対する抗精神障害特性
不安	筋緊張、不穏状態、疲労、集中困難の減少、不安とストレスのげっ歯類動物モデルにおける社会的相互行為(他の個体との関わり)の向上; 患者における社会不安の減少
抑うつ	抑うつのげっ歯類遺伝モデルにおける抗うつ作用
がん	広範囲に及ぶがんの種類における抗増殖及び抗浸潤活性; オートファジー介在性がん細胞死の誘発; 化学予防作用
吐き気(悪心)	吐き気(悪心)の抑止とラットにおける条件付きギャッピング(大口開け:吐き気を意味する行動)
炎症性疾患	いくつかの <i>in vitro</i> 及び <i>in vivo</i> モデルにおける抗炎症特性; 炎症性サイトカイン及び経路の阻害
関節リウマチ	動物モデルにおけるTNF-αの抑制
感染症	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌に対する活性
炎症性腸疾患とクローン病	<i>in vivo</i> 及び <i>ex vivo</i> におけるマクロファージ動員及びTNF-α分泌の抑制; クローン病患者における疾患活性指数の減少
心血管疾患	<i>in vitro</i> 及び <i>in vivo</i> における抗酸化及び抗炎症特性を通じた梗塞サイズの減少
糖尿病合併症	心筋機能不全と繊維化の減衰

in vitro 試験管内での実験

in vivo 実験動物などを用いた生体内での実験

ex vivo 生体外で培養細胞組織での実験